

繊細なススキの花の美しさ

投稿

信州口腔外科インプラントセンター所長

北村 豊

秋の七草の一つにススキがある。ススキは陽当たりの良い草原に多く見られるものであるが、伝統的な日本の生活スタイルが大きく

マメ科のクララを食草としているオオルリシジミの絶滅危惧化も急速に進行していつてしまっている。

変化し、茅葺きが行われなくなった、屋根を被つていた主たる材料のススキが用いられなくなったこともあり、秋の刈り取り、冬から

日本の原風景といってもいいススキではあるが、花穂の時期によっていろいろな美しさを見せてくれるのも私にとっては恒例の毎年の楽しみとなっている。

春先にかけての火入れが長年の間、日本では行われていたが、最近ではほとんど実施されなくなってきたことにより草原の喪失、そしてその「被害者」の一例を挙げるなら、草原に生える

ススキの花の季節は晩夏〜秋であり、ススキは日本人にとつて、とても馴染みのある植物のはずなのに、今回は多くの人々が見たことが無いであろう「ススキの花」の写真を掲載した。花といつても花卉(俗



雄しべ

雌しべ

ススキの雄しべと雌しべ
2025年8月24日16時

志賀高原にて撮影

称・花びら)の無い花も多く、今年は大値で大きな騒ぎになった米を捻らせるイネ科の植物は、このススキも含めて花卉は無い。その他にも「これは花卉に間違いないでしょ!」と思われ誤解されている植物も多いが、私は自分で疑問を持ち自分で調べてみることを忘れた現代社会の多くの老若男女の人達に、自分自身にとつての「発見」の喜びを見つけて退化しつつある脳細胞に刺激を与えてあげていただくことを望むことに留めておこう。

さて、イネ科植物は花卉は無いと書いたが、種子植物であり、花卉は無からうが花は生殖器官で、雄しべと雌しべは持っている。

日本国民の多くが待ち望むソメイヨシノには開花宣言があるように、「生物季節観測指針」というものが、気象庁によって作成され、記録が続けられていっている。この生物季節観測の目的は、気象庁のこの指針によれば「植物の状態が季節によって変化する現象について行う観測をいい、その目的はその観測結果から季節の遅れ進みや、気候の違い、変化などを総合的な気象状況の推移を知ることにある。」と記されている。この気象庁の作成した指針の中には、ススキの開花の観測方法についても記さ

れていて、「ススキの開花日」とは葉鞘(ようしよう)・単子葉植物の葉の基部がさやのように茎を包んでいる部分)から抜き出た穂の数が、穂が出ると予想される全体数の約20%に達したと推定される最初の日」となっている。

私がここに掲載した写真を志賀高原で撮影したのは8月24日で、鈴なりの黄色の雄しべ(葯)と茶褐色でブラシのようで棒状の雌しべが見られた。

花粉を一杯つめた袋状の葯(やく)とも呼ばれる雄しべは、とても細くて短い柄のような構造物で吊り下げられていて、微風にも一つの穂から吊り下がった多数の雄しべが小さいながらも一斉にダンスをしているかの如く、揺れ動く姿にはとても感動すると同時に、私は得もいわれぬ風情を感じてしまう。

花の時期が過ぎて綿毛と種子をつけて秋の草原を真っ白に染めるススキも素敵ではある。しかし、私にはそのようなマクロの世界よりこのミクロの雄しべに惹かれてしまう。微少な動きではあるものの、これからの若き故の躍動感を感じてしまうからであろうか…。

老若男女の皆様、そして最近よくニュースになつておられる教職関係の方々、ススキの花は植物学的には完全な生殖器官ではありませんが、見ても写真を撮影しても罪に問われることはありません!!

是非ススキの花が咲いている時にこの身近な植物の魅力を観察して下さい。強くお勧めする。